

福井県医師会

だより

第636号 平成26年(2014)6月



待ち侘びた春

福井市 石黒 信彦

表紙写真説明：待ち侘びた春

福井市 石黒 信彦

6月。白山に遅い春がやってきた。雪が解けたばかりの沢沿いの斜面では、リュウキンカがまっ黄色の花を付け楽しそうにはしゃいでいた。待つこと1時間、雲の中から別山の頂きがようやく現れた。

## 醫 縫 録

# 皮膚科治療のめまぐるしい進歩

福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学教授 長谷川 稔



昨年6月1日に金沢大学から赴任してまいりました長谷川と申します。出身は勝山市（勝山高専卒）であり、福井県で仕事ができる機会を得られましたことをとてもありがたく思っております。

さて、私は平成3年に皮膚科に入局しました。学生時代の同級生の中に、「皮膚病は沢山あるが、ほとんどはステロイドを外用するだけだ」と言っていた者がいます。皮膚科に入ろうと考えていた私は、「失礼なことを言うな」と思ったものです。ただ、実際に皮膚科医になると、確かにほとんどの疾患でステロイドの外用治療をすることになり、同級生の言っていたことも決して間違いではありませんでした。そうとはいえ、ただステロイドを塗ればよいのではなく、症状の強さ、部位、年齢、経過（急性のものか、慢性のものか）などを総合的に考慮して、ステロイドの強さを選択します。また、白癬（みずむし、たむし）や伝染性膿痂疹（とびひ）などの感染症にステロイドを外用した場合には、症状は当然悪化しますので十分な注意が必要です。それから20年近く、免疫抑制剤なども一部の重症例に使われるようになったものの、皮膚炎症性疾患の治療の基本はやはりステロイド軟膏などによる外用治療でした。

しかし、平成22年、本邦でも乾癬（かんせん）に対して、サイトカインTNF- $\alpha$ を阻害する抗体（生物学的製剤）による治療が保険収載されました。本治療は、劇的な効果を示し、その後も別の抗TNF- $\alpha$ 抗体、抗IL-12/23抗体などが使われるようになりました。現在は、抗IL-17抗体、抗IL-17受容体抗体などの臨床試験が本邦でも行われており、近い時期に患者さんに投与できるようになりそうです。これらの抗体治療を行うと、製剤の種類にもよりますが、2週間～3ヶ月に1回注射を続けている間は、これまで全身にステロイドを外用しても軽快しなかった皮疹の大半が消失しています。こ

れまで全く考えられなかった、夢のような治療です。人目を気にして苦しんでいた生活や今までの治療は何だったのか？と言われる方もおられます。ただ、福井県ではこのような最新の治療が十分普及していないため、福井大学医学部附属病院皮膚科でも乾癬に生物学的製剤（バイオロジクス）による治療を行う専門外来である“バイオ外来”を開設しています。

このような治療の進歩は、乾癬だけではありません。アトピー性皮膚炎でもサイトカインをターゲットとした抗体治療の臨床試験が行われています。さらに、私が医師になった頃から手術以外には治療効果が期待できなかった悪性黒色腫にも、ようやく効果のあるいくつかの分子標的薬が近いうちに使えるようになりそうです。また、以前は皮膚腫瘍を外用剤で治すということは考えられなかったのですが、皮膚の表皮内癌を局所の免疫を賦活する外用薬によって治すこともできるようになってきました。そして、このような臨床経験から、皮膚というのは単に内臓を覆って守っているだけでなく、非常に高度に制御された免疫臓器であることが明らかとなってきました。これまで、他の臓器に比べてなかなか画期的な治療法が開発されなかった皮膚疾患ですが、ようやく皮膚科診療に光の当たる時代、“皮膚科の時代”が来たのではないかと思います。

福井県にはまだまだ皮膚科医が足りません。医局員も数えるほどです。しかし、今後は多くの立派な皮膚科医を育てるべく頑張ってまいります。福井県医師会の皆様には何かとお世話になるかと思いますが、ご指導、ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。